



No. 9
 平成3年(1991)10月15日
 編集・発行
 津田左右吉博士顕彰会
 (美濃加茂市太田町3425-1)
 TEL0574-25-4141

— 津田博士胸像建立についてお願い —

会長 間 宮 瑞 夫

本会が発足してから8年になります。この間、津田賞少年作文発表会、作文集発刊、モニュメント建立、伝記資料展と講演会、博士に関する資料探訪、調査、記録など顕彰事業を進めてきました。会員の皆様はもとより市域内外の多数の方々のご理解、ご支援によるものです。厚くお礼申しあげます。

さて、顕彰の重要な事業の一つとして胸像建立が前々から懸案になっておりましたが本年度いよいよ着手することになりました。この事業は、会の経済的基盤や目的から本事業にご賛同いただけるすべからずの方に参加いただくこととしました。なにとぞよろしくお願ひ申しあげます。

なお、胸像建立委員には博士に直接、間接ゆかりのある方を中心に次のように構成させていただきました。

- 委員長 山 田 實 紘
- (栃井出身、木沢病院副院長)
- 委員 小 森 貞 太 郎
- (元市教育長)
- 委員 尾 関 公 見
- (初代会長)
- 委員 曾 根 晚 彦
- (早大出身、前東海女子大学長)
- 委員 三 宅 祥 雅
- (早大出身、前東濃高等学校長)
- 委員 酒 向 一 次
- (元養老女子商業高等学校長)
- 委員 奥 田 浩 雄
- (下米田小学校長)
- 委員 渡 辺 隆 晴
- (下米田小学校PTA会長)
- 委員 古 田 基 純



- (下米田自治連合会長)
 - 委員 間 宮 瑞 夫
 - (顕彰会会長)
 - 委員 大 沢 功
 - (顕彰会副会長)
- 建設計画の主な内容は次のようです。
- 一 胸像 銅像、高さ八〇センチ、台座付き
 - 二 場所 下米田小学校校庭(博士の母校)
 - 三 募金額 三百万円
 - 四 募金期間 平成三年十月 平成四年二月
 - 五 依頼額 一口千円、二口以上

平成2年度事業から

委員会活動

胸像建立準備委員会

・委員名(敬称略、◎印委員長)
間宮瑞夫、大沢功、土屋保、
諸橋彩子(以上、本会役員)、
奥田浩雄(下米田小学校長)、
◎渡辺勝、加木屋成(地域代
表)の以上七名。

・活動内容

二回の委員会を開催し、建
立時期、建立場所などについ
て協議し、第三回理事会(決
算理事会)において協議結果
を報告しました。

〈協議経過〉

第一回委員会(平成3年2
月5日)では、建立計画原案
づくりと、活動組織について
協議し、第二回委員会(平成
3年2月19日)では、胸像建
立の課題について順次協議を
進めました。とくに、①建立
時期では、(ア)博士の没年記念
とするか、または、(イ)市の「文
化の森(博物館)」建設時にす
るか。②建立場所では、(ウ)市
の中央か、(エ)地元の下米田に
するか。③本顕彰会事業の
将来計画からみてどうか。な
どについて協議しました。

編集委員会

・委員名(敬称略、◎印委員長)

千賀恒雄(津田賞審査委員長)、
西山喜洋(学識経験者)、田口
博(リ)、◎酒向年雄(リ)、
渡辺明朗(地域代表)、渡辺靖
子(下米田読書サークル代表)
の以上六名。

・活動内容

二回の委員会を開催し、郷
里に残る伝記資料の記録や紹
介をしていくため、具体的な
編集方法や編集内容、シリー
ズものとするなどについて
協議し、第三回理事会にお
いて報告しました。

〓お知らせ〓

・美濃加茂ライオンズクラブ
津田賞の作文応募者全員に
作文集が配布できるようにと
例年以上の助成金を頂きまし
た。

また、ライオンズ管内の多
数の方々に本会へ入会してい
ただきました。

・「早稲田大学百年史」の寄贈

当市出身者で早稲田大学に
最もゆかりのある遠藤博士・
津田博士顕彰会に「早稲田大
学百年史」3巻のご寄贈があ
りました。

〓文庫〓

博士の著書の中でも極めて
評価の高い「文学に現はれた
我が国民思想の研究」(岩波
文庫・全八巻四七一〇円)が
復刻されました。



〓先進地視察研修(東海市)〓

去る平成2年9月12日人物
顕彰活動の先進地である東海
市の細井平洲(以下、平洲会)
の顕彰活動を視察研修しまし
た。

今後の組織・事業の強化を
はかる目的で平洲会と交流会
をおこない、東海市立平洲記
念館も訪問しました。

・参加者数 二十七名

〓トピックス〓

「郷土に輝く先人」に博士
が選ばれる!

置県百二十年を記念した郷
土の先人顕彰事業で、21人の
中に学術・教養の部で津田博
士が選ばれました。この地域
では坪内逍遙博士も選ばれま
した。

また、それぞれの功績を紹
介する顕彰本を製作すること
になっています。

「津田賞」入賞者

平成2年度の津田賞は、小学校五・六年生の部に九五二名、中学生の部に一五五名の応募がありました。多数の応募、ありがとうございます。

また、お世話になった学校関係者の方々に厚くお礼申し上げます。

入賞者は以下のとおりです。

○小学校五・六年生の部

【最優秀賞】

「私たちの先生」(高加小六年)

梅村祥部(高加小六年)

【優秀賞】

「私の先生」(高加小六年)

坂井美穂(蜂屋小六年)

「ぼくの大好きな山之上」

山田邦彦(山之上小五年)

【佳作】

「伝えてあげたい」(大橋小六年)

市川幸(太田小六年)

【私の先生】(高加小六年)

馬場里英子(古井小六年)

「通訳になることをめざして」

渡部夕佳(山之上小六年)

「こんな人になりたい」

三橋圭介(加茂野小五年)

「私はこんな人になりたい」

佐合美穂子(下米田小六年)

「わたしのしょうらいを考えて」

板津ひとみ(山手小五年)

「私はこんな人になりたい」

北村絵理子(坂祝小六年)

○中学生の部

【最優秀賞】

「通訳への夢」

鈴木淳子(双葉中三年)

【優秀賞】

「母の姿から学んだ私の生き方」

兼松良理子(西中三年)

「私の将来」

片桐栄(坂祝中三年)

【佳作】

「夢に近づくために」

夏原陽子(西中三年)

「私の将来」

岡田真理子(東中三年)

「私の将来」

上坂葉子(双葉中三年)

「僕の将来」

横堀一郎(東中二年)

「夢の実現へ今考える」

山田美穂(東中二年)



※以上学年は平成2年度当時

津田博士の思いやり

大沢 功

津田博士は学問研究において、極めて厳しい態度で臨まれたが反面社会人、家庭人としてのお人柄は慈愛深い、人間味あふれるお方でありました。このことは数々のエピソードに伺うことができます。

日常のご生活は極めて簡素でテレビや電話はなく、すべて研究に力を打ち注がれました。名利に遠ざかり、晩年に至っても研究心は衰えず、清貧にあまんじられたご生涯でした。

戦時中、南原繁先生が所用で津田博士宅を訪ねられた時、高名な津田博士が、まるで僧房のように質素な生活ぶりであつたのをまのあたりにされて、驚嘆したと後年語っておられる程です。

二十年六月先生のお弟子さんであつた故千葉真幸氏の郷里、平泉村に戦禍をさけて疎開され五年余お元気にお過しになりました。

その間、土地の人々と親しく交われ、とくに何十回も博士の仮寓を訪れて、指導を受けられた佐々木実高氏は、津

田先生はいつお訪ねしても孜孜として机に向つておられた。その先生を淳朴な土地の人々も何かというお訪ねたり、あれこれ会合に呼びだしたりしました。そのたびにイヤな顔一つされずに出ていただいたが、ある時、先生とさし向いのおり「私の母は九十歳以上の長寿を保ったが、もし私もそれだけ生きることができれば私のいま頃に描いている学問の系列がなんとなくまとまるであろう。」と何気なく言われた。そういう長期のタイム・テーブルを作っていられる先生の貴重な時間を自分たちが心なくむしり取っていたかと、まさに冷汗(ひよせんと)の思いをした。」

と述べられ、「中尊寺の藤原四代の遺体学術調査には、自ら調査団員として参加され、本堂裏の全く火の気のない調査室で、老齢にもかかわらず、厳冬の中を連日調査にたずさわられたお姿は文化映画「中尊寺に残され、学者として御風貌に接することができるとは、限りない喜びである。」と中尊寺一山の宗教局執事でもあつた同氏は津田博士のおもかげを偲んで居られます。

田先生はいつお訪ねしても孜孜として机に向つておられた。その先生を淳朴な土地の人々も何かというお訪ねたり、あれこれ会合に呼びだしたりしました。そのたびにイヤな顔一つされずに出ていただいたが、ある時、先生とさし向いのおり「私の母は九十歳以上の長寿を保ったが、もし私もそれだけ生きることができれば私のいま頃に描いている学問の系列がなんとなくまとまるであろう。」と何気なく言われた。そういう長期のタイム・テーブルを作っていられる先生の貴重な時間を自分たちが心なくむしり取っていたかと、まさに冷汗(ひよせんと)の思いをした。」

と述べられ、「中尊寺の藤原四代の遺体学術調査には、自ら調査団員として参加され、本堂裏の全く火の気のない調査室で、老齢にもかかわらず、厳冬の中を連日調査にたずさわられたお姿は文化映画「中尊寺に残され、学者として御風貌に接することができるとは、限りない喜びである。」と中尊寺一山の宗教局執事でもあつた同氏は津田博士のおもかげを偲んで居られます。

その頃、土地の人々と親しく交われ、とくに何十回も博士の仮寓を訪れて、指導を受けられた佐々木実高氏は、津

田先生はいつお訪ねしても孜孜として机に向つておられた。その先生を淳朴な土地の人々も何かというお訪ねたり、あれこれ会合に呼びだしたりしました。そのたびにイヤな顔一つされずに出ていただいたが、ある時、先生とさし向いのおり「私の母は九十歳以上の長寿を保ったが、もし私もそれだけ生きることができれば私のいま頃に描いている学問の系列がなんとなくまとまるであろう。」と何気なく言われた。そういう長期のタイム・テーブルを作っていられる先生の貴重な時間を自分たちが心なくむしり取っていたかと、まさに冷汗(ひよせんと)の思いをした。」

と述べられ、「中尊寺の藤原四代の遺体学術調査には、自ら調査団員として参加され、本堂裏の全く火の気のない調査室で、老齢にもかかわらず、厳冬の中を連日調査にたずさわられたお姿は文化映画「中尊寺に残され、学者として御風貌に接することができるとは、限りない喜びである。」と中尊寺一山の宗教局執事でもあつた同氏は津田博士のおもかげを偲んで居られます。

その頃、土地の人々と親しく交われ、とくに何十回も博士の仮寓を訪れて、指導を受けられた佐々木実高氏は、津

田先生はいつお訪ねしても孜孜として机に向つておられた。その先生を淳朴な土地の人々も何かというお訪ねたり、あれこれ会合に呼びだしたりしました。そのたびにイヤな顔一つされずに出ていただいたが、ある時、先生とさし向いのおり「私の母は九十歳以上の長寿を保ったが、もし私もそれだけ生きることができれば私のいま頃に描いている学問の系列がなんとなくまとまるであろう。」と何気なく言われた。そういう長期のタイム・テーブルを作っていられる先生の貴重な時間を自分たちが心なくむしり取っていたかと、まさに冷汗(ひよせんと)の思いをした。」

と述べられ、「中尊寺の藤原四代の遺体学術調査には、自ら調査団員として参加され、本堂裏の全く火の気のない調査室で、老齢にもかかわらず、厳冬の中を連日調査にたずさわられたお姿は文化映画「中尊寺に残され、学者として御風貌に接することができるとは、限りない喜びである。」と中尊寺一山の宗教局執事でもあつた同氏は津田博士のおもかげを偲んで居られます。

の食糧難で日々の食事にも事欠く状態でありましたが、博士は、ご不自由の中にもまずまずのご研究生活を続けられたようです。

疎開された年のくれに早大史学科の学生が萩野三七彦教授に引率されて平泉を訪れました。当時の学生は著書を通じてのみ博士を知っていたに過ぎなかつたので博士の醫咳(いせ)に接するために、はるばる平泉を訪れたのです。中尊寺近くの茶屋で津田博士は一行を待つておられ、初対面の学生に対して、こまやかな親しみのある応待をされたので、か

えって学生が恐縮し、多少戸惑った睡(ねむ)でした。博士は峻厳(じゅんげん)な一面こうした慈愛深い方でありました。

博士の仮寓にも何い、雑談も終つて辞去しようとした時、奥様から萩野先生にお米を持ち帰るようにといわれて、その貴重品を押し載せて帰京したと語っておられます。不十分な配給米を残してそれを分かち与えておられたことは津田家を訪れた何人かの方も経験しておられるようです。

この時、居屋に掲げられていた風景画(落合辺の残雪のスケッチ)が、大正十年、曾

田先生はいつお訪ねしても孜孜として机に向つておられた。その先生を淳朴な土地の人々も何かというお訪ねたり、あれこれ会合に呼びだしたりしました。そのたびにイヤな顔一つされずに出ていただいたが、ある時、先生とさし向いのおり「私の母は九十歳以上の長寿を保ったが、もし私もそれだけ生きることができれば私のいま頃に描いている学問の系列がなんとなくまとまるであろう。」と何気なく言われた。そういう長期のタイム・テーブルを作っていられる先生の貴重な時間を自分たちが心なくむしり取っていたかと、まさに冷汗(ひよせんと)の思いをした。」

と述べられ、「中尊寺の藤原四代の遺体学術調査には、自ら調査団員として参加され、本堂裏の全く火の気のない調査室で、老齢にもかかわらず、厳冬の中を連日調査にたずさわられたお姿は文化映画「中尊寺に残され、学者として御風貌に接することができるとは、限りない喜びである。」と中尊寺一山の宗教局執事でもあつた同氏は津田博士のおもかげを偲んで居られます。

宮一念氏が津田博士に感謝の意をこめて贈られた作品でした。同氏が画家としてかけ出しの頃、アトリエ建築の費用に苦慮しておられたのを、津田博士が友人池内先生から曾宮氏のことを聞かれて、同氏を通じて、原稿料をこっそりと届けて、励まされたのでした。その後曾宮氏が病臥中もたびたび大学からの帰途お見舞に寄られ、「若い私を一人前扱いにしてください……」と博士の、思いやりに感謝して當時を回顧しておられます。たびたび雑誌の取材で飯塚を訪れた小杉一雄も疎開先にまで持参されて掲げられておられた津田博士のこの絵に対する特別な思いを知って感激したとのべておられます。

津田左右吉全集第二十七巻には、「日信」と題されて、博士が若き教師鈴木拾五郎、佰子夫妻に二年余りにわたって送り続けられた日々の便りです。手紙文は少く、博士の随想録といえる内容です。博士のお二人に対する並々ならぬ愛情を見ることが出来ます。また、学者として一番油ののりきった時のお考えを知ることが出来ます。佰子夫人は娘時代を三年半博士夫妻の下で

実の娘同様に暮らされており、結婚後も何くれとなく世話を受けられ、やがて生まれた二人のお嬢さんに、秀枝、瑞枝という命名もされてまるで自分の孫のようにつくしんでおられ、両家の交わりは実の親子でも出来ないような親密なもので、博士亡きあと津ね夫人とも長く続けられました。

博士はまた学者として多くの有名なお弟子を持たれましたがとりわけ栗田直躬先生には全幅の信頼を寄せられていました。あの五年余二十一回の裁判において、栗田先生は大学を休職し、ただ一人の特別傍聴人として、津田博士の片腕となり活躍され文字どおり身命をとものにされました。

昨年の津田展の折、栗田先生は、愛蔵の津田博士関係の資料を心よく出展して下さいました。とりわけ秘蔵の津田博士像に、特別の台座を作成されて、お貸しく下さいました。恩師津田博士への特別な思いがこめられていて私どもは強い感動にかられました。博士が栗田先生に出された書簡は約六百通にも達し、これをことごとく栗田先生が保存されており全集補巻二でその内容をつぶさに知ることがで



津田博士像

きます。何とうるわしい師弟愛でしょうか。

今、下米田小学校校長室に掲げられている津田博士像は、生前の博吉尾関元校長先生が懇請されて、「母校のために」と特別なはからいで贈って下さったもので博士晩年の姿を偲ぶことのできる貴重な肖像画(昭和三十二年作、画家、寺崎武男氏はイタリアに長く壁画研究で留学された方で、明治天皇軍人勅諭を賜わるの図を描いておられる)で、下米田小学校の児童のみなさんに今も語りかけられるような温容な博士の姿です。津田博士お気に入りのお像でこよなく愛しておられたものを惜気もなく母校に寄贈して下さいました博士のご心情をここにも感ずることが出来ます。

「津田文庫」についても、博士のあたたかい思いやりのあらわれであることを、たびたびの書簡で知ることが出来ます。